

電車からバスの時代へ



▲紅葉谷を走るバス

昭和8年、登別温泉軌道株式会社が登別温泉株式会社に社名を変更し、登別温泉までの交通機関を電車から17人乗り2台、21人乗り1台のバスに切り替えました。

そして、昭和18年、同社のバス事業を道南乗合自動車株式会社に譲渡。その後、戦争が激しくなって老朽バスの入れ替えができなくなり、客の輸送にも事欠くようになりました。

そのため、昭和21年からトラックを借りて送迎を始めましたが、客から苦情が寄せられたため、トラックに幌をかけ、板の腰掛けを付けて運行しました。

円太郎馬車から馬車鉄道、軽便鉄道、電車、バスと目まぐるしく移り変わった交通機関は、登別温泉の発展に大きく貢献しました。



▲昭和初期の登別温泉バス停留所

道路網の整備

観光産業の発展に欠かすことのできない道路網。昭和24年、支笏洞爺国立公園が指定されたことに伴い、登別温泉地獄谷から大湯沼までの遊歩道や倶多楽湖周辺道路が年次計画で整備されるようになりました。

昭和29年には登別から登別温泉、カルルス、オロフレ峠を経て洞爺湖に至る道路が道道に昇格。登別と登別温泉間が舗装され、砂ぼこりが舞っていた道路の問題が解消されました。続いてカルルスとオロフレ峠までの改良工事、昭和32年には登別温泉とカルルス間の道路の切り替え工事が行われ、昭和35年に完全舗装されました。

問題解消のために  
道路が整備される

登別温泉に向かう登別からの道路は、さまざまな交通機関が走った唯一の幹線道路です。

昭和50年代に自動車が増速に普及して交通量が増加し、さらに昭和60年に道央自動車道登別東インターチェンジの開設に伴って交通量の増加が予想されていました。

そのため、昭和58年から平成9年にかけて、国道交差点から紅葉谷交差点までの区間の道路整備が行われました。

また、温泉街のメインストリートの『極楽通り』は、ホテルや商店が建ち並び、大型観光バスなどの交通量の増加に伴い、朝夕の観光客の行き帰り時間帯には交通障害が発生していました。



▲大正15年当時の登別温泉街

そのため、登別温泉地区の安全で円滑な交通確保を図るために、温泉バイパス（登別厚生年金病院〜第一滝本館の区間）の整備が望まれました。



▲整備が進む温泉バイパス

そして、今年度、平成3年から行われた温泉バイパスの整備が完成します（予定）。また、その整備に伴い、間欠泉を活用した泉源公園（旧登別パラダイス跡地）も完成します（予定）。

みんなで祝おう開湯150年

7月20日(日)には、泉源公園で開湯150年記念式典と泉源公園開園式を行う予定です。

また、そのほかにもさまざまな記念事業を予定していますので、湯のまちに住むみんなで参加して、開湯150年を祝い、登別温泉のさらなる発展を願いませんか。